

川 責任ある消費生活学 下 熱帯林と日本人の関係から

【下山】アイスキヤンドルスクエア講演会「私たちの生活とボルネオの森」が、十四日午後六時半から恵林館で開かれた。

日常の消費生活を見直すきっかけに、と町民有志で組織した同実行委員会（瀬川悦弘委員長）が主催。町内外から八十人が参加。ボルネオ保全トラスト責任者の坪内俊憲さんが「熱帯雨林と日本人の関係〜責任ある消費者による生物多様性保全活動」をテーマに講演した。

坪内さんは「私は以前、フィリピンに生息するワニの保護を自分の価値観で地元漁師に押し付けた。だが、魚を捕ろうとした何人も漁師がそのワニに食べられており、その原因は私たちがつくっていた。私が日本で日常的に食べていた卵は、



80人が参加した「ボルネオの森」講演会

その漁師たちが捕った魚を飼っていた。保護は価値あるものを危害から守ること。保全とは管理しながら利用してそれを維持すること。価値は人それぞれで異なるが、価値観による保護ではなく、お金による保全を考える

よつになつたと話した。また、日本ではアブラヤシの実から採れるパーム油を安くて環境負荷が少ない優れた資源として、食品や化粧品など多くに利用しているが、パーム油を採るためにボルネオ島の熱帯雨林が切りられ、ブ

ランテーションが拡大し続けており、動物たちの住む場所を奪っている」と説明。

「便利な暮らしが森に付けた火を打ち消せるだけの保全活動があれば、多様な生物と共存できる社会がつけられる」と話し、パーム油を使用している企業が売り上げの1%を熱帯雨林や生息生物の保全に寄付している活動を紹介。「森を失えば私たちの子供も住んでいけない。1%の優しさが子供たちを守ることになる」と訴えた。

会場からは多くの質問が寄せられ、「家庭でできることは何か」との質問に「外から安く買うのではなく地元で作ったものを消費すること。外から買う場合は、保全活動を支援している企業から買ってもらうとありがたい」と回答した。

「森林管理はどうあるべきか」との問いに「熱帯と寒い土地では違つが、植林をやめて森林が再生、活性化で

きる形で木を切り、成功している事例がある。」「貧困問題」では「共に生きることや、情報を自分だけの判断力を養えれば解決できる」と述べた。参加者たちは持続可能な生活に向け、地産地消への意識を強めていた。

名寄新聞

発行所 名寄新聞社
本社 〒109-0013
名寄市大通東三丁目
電話 0194-22-1117
FAX 0194-22-1118
URL http://www.namiyama-shimbun.com
〒109-0013
〒109-0013
〒109-0013
FAX 0194-22-1118